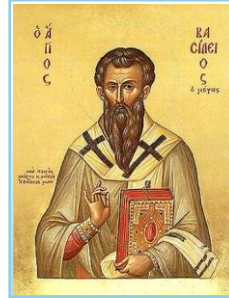


6月14日

主教教会博士バジル

Βασίλειος καισαρείας
(330頃～379)
～カパドキアの三教父～



「カイサリアの
バシレイオス」
(聖大ワシリイ)
のイコン

彼の名「バジル」は英語読みで、人名辞典などではバシレイオスとなっている。彼はカパドキアの三教父の一人であるが、彼の父バシレイオスは有名な修辞家であり、弟にはニュッサのグレゴリオスをもつ。なおこの家族はカトリック教会では父と母は聖者、祖父は聖殉教者、祖母と姉は聖女、二人の兄弟は聖人に定められている。

さて、バジルはカパドキアのカイサリア、コンスタンティノポリス、アテナイで学んでいく。そしてアテナイにおいて同郷の友人ナジアンソスのグレゴリーと再会し、学びを続けていく。

帰郷後、しばらく修辞学の教師をするが、この世の名利に溺れて人生の目的を忘れないかと心配した姉マクリーナの勧めで修道生活に入る。

370年、カイサリアのエウセビオスのあとにカイサリアの司教となる。そしてそのころ起こった教理論争の中、筆と論述で戦っていく。キリストは真の神ではないとするアリオス主義、キリストは真の人間ではないとするアポリナリス、聖霊の神格を否定したエウスタチウスという異端に対して、彼は著作をあらわし、またナジアンソスのグレゴリーらと行動をともにしながら、三位一体論を展開していく。

彼は人望が厚く、それを見込んだ当時の皇帝

はバジルをアリオス派に引き入れようと、総督に指示した。総督は断った彼に対して、財産の没収や鞭打ち、流罪や死罪と脅迫を重ねていったが、バジルは平然とこのように答えたという。

「わたしは修道士なので没収される財産もなく、苦行に慣れているので鞭打ちもこたえない。真の故郷は天国なのでどこに流されても大して変わらないし、死刑になればさっそく天国に行けるので、むしろ願うところである。」

これには総督も度肝を抜かれ、「彼の固い信仰はわたしの手に負えません」と皇帝に報告した。

その後、彼は半アリオス主義とニカイア信条との和解に尽力をする。彼の死後まもなく開かれたコンスタンティノポリス公会議(381年)の成功は彼によるところが大きい。(Y)

<特禱>

全能の神よ、あなたは主のしもべ、主教教会博士バジルの教えによって公会を照らして下さいました。どうか天の恵みをもって公会をますます豊かにし、忠実な証びとを起して下さい。その生活と教えに倣い、わたしたちがすべての人に救いの真理を宣べ伝えることができますように、主イエス・キリストによってお願いいたします。

アーメン